

The Reminiscence of Exellia 蒼天のヴァルマーレ

終幕までの行進曲III

作成レギュレーション

基本概要

- ・経験点：307500 点
- ・資金：440000G
- ・名誉点：2200 点
- ・成長回数：380 回
- ・レベル制限：13～14

制限事項

- ・放浪者／蛮族 PC 禁止
- ・バニラ流派入門・秘伝使用禁止
- ・武器防具強化に関する特殊制限
- ・シナリオ報酬成長回数が 10 以上のとき、その 6 割の偏重割り振りの禁止
- ・戦利品判定は振る

その他注意事項

- ・レベル制限逸脱 PC の Lv シンク
- ・ステータス制限逸脱 PC のステータス再振り分け
- ・成長回数制約逸脱時の強制デッドエンド

メモ群

聖王家階級論考：上巻

聖王家として知られる「アウェア家」は、名に役職が含まれる。

聖王職を示す「ゼーゲブレヒト」、これに続く王族は、基本的に「ゼーゲクライン」を名乗る傾向が多い。

火防女を示す「フォイアヴェヒター」は、基本的に女しかないとされるが、時代の変遷の中で、『男の火防女』も出現したらしいことは明言されている。

また、伴侣などはこの役職名を名乗らないとされる。

導入　～デッドカウント、開始～

君達は、ムサシの元まで戻ってきた。

ムサシ

「お前ら無事か！？」

(※GM メモ : RP 待機)

ムサシ

「そうか。ディスエリィアが…。よりもよって、面倒極まる連中が…！
ただでさえ、ヴァルマーレ神道とも敵対しているのに…！面倒くさい奴らめ！」

ムサシの慟哭に、君達も頷くなどして同意するだろう。

そこに、リリアーナらが訪れる。

リリアーナ

「遅れてしまってすみません。

バヌバヌ族の長老には、事のあらましを報告してきました。フヴィートヴァルを鎮めた
件は、大変喜んでいましたよ。英雄様。君には、よくよく礼を伝えておいてほしい、と言
うことだそうです」

(※GM メモ : RP 待機)

ケーシス

「幸い、バヌバヌ族の村人たちには、大した被害はなかったようだ。

突然の侵攻で、酷くビビり散らかしてはいたようだがな」

リリアーナ

「あの集落に『鍵』がないと分かった以上、コミニテルンが、再び襲う可能性は低いでし
ょう。ムサシ、天皇追撃のための準備はいかがです？」

問われたムサシは、ニヤリと笑いながら答えた。

ムサシ

「ええ、ええ！『超戦艦ムサシ』固有能力、ミラーリングシステムを用いれば、『ソラール号』の行き先、『魔大陸』へと辿り着くことができるでしょう！」

さあ、行きましょう！」

(※GM ×モ：RP待機)

そう言って、君達を乗せた『超戦艦ムサシ』は、魔大陸へと向かっていった。

見えた魔大陸は、中々なものだったが…ミラーリングシステムの暴力を以てしても、突入がままならない。

ムサシ

「ちいっ、このままだと船体が持たない…！一時撤退だ、取り舵一杯、これより当艦は等護に帰投し、一度体勢を立て直す！」

帰投後

ムサシがふてくされた様子で、座り込む。

リリアーナ

「私達がこうして帰ってこれたのは、あなたの、戦艦の操縦技量によるものが大きいと思いますよ？ムサシさん？」

ムサシ

「でも、見てくればそんなだけど、内部の損傷が大きい。
あんまりのんびりしてられないのにこの体たらくで…ごめんね」

はあ、ここから徹夜かーと言うムサシ。自身のもう一つの身体と捉えているのだろう、頑張れるのも分かる話だが…。

PCへの選択肢

- ・寝てくれ
- ・とりあえず、休もう

(※GM ×モ：RP待機)

ムサシ

「修理しながらだけどさ、聞いて欲しい。『魔大陸』には、ミラーリングシステムをも受け付けないほどの『魔法障壁』みたいなものがあった。…恐らく、例の『魔大陸の鍵』には、あれを突破できる『仕掛け』があったのよ。

「いずれにせよ、対策を練らなければ『魔大陸』に侵入できない。まずは『神道衛士団本部』に赴いて、『ミシガン』卿と、うちの上司をはじめとする、関係者を交えて報告しないとね」

一方、フレイディア

一方、フレイディア——

龍姫公

「最近異常は？」

フレイディアの冒険者

「はっ、特に異常はありません。ただし、既にディスエリィアの兵士が降下し、このフレイディアを取り囲んでいます」

「エーディンさん、これから私達はどうなるんでしょう…」

フレイディアの冒険者たちは、不安そうに龍姫公を見る。

龍姫公は悩んだように、目を閉じる。

龍姫公

「やらせはしないよ、この名に懸けてもね。

…エクセリア、お前はお前の家族を護れ。暫く、ここは私が受け持つ」

魔大陸対策会議

数時間後。

神道衛士団本部にて、君達は狭い部屋に集まっていた。

クリストフ

「いやはや、困ったものですよ。まさか、あんなものがあるなんて」

スチュアート

「『魔大陸』…。あれは決して放置できるものではない…」

そう話していると、シンファクシ伯爵が口を開く。

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「よくぞ無事に戻られた。未だ恐怖は晴れぬが、心配は無用…。さて、本題に移ろうではないか」

彼が目配せした、金髪オールバック眼鏡の男…V.IIスネイルが口を開く。

スネイル

「…つまり、『魔大陸』とは、魔動機文明が築いた人工浮遊大陸らしい、ということだ。

陛下たちも、そこに向かったとみて間違いないだろう…と、部下のホーキンスが分析しています」

ミシガン

「なるほど、状況は理解したぞ」

スネイル

「問題は、ムサシが提示したこれ。高密度のマナ・ビロードです。次元空間曲率変位システム…すなわち、ミラーリングシステムの影響下でも、無理に接近しようとすれば、真っ逆さまに落ちていくことになります」

スネイルが提示した端末に、ムサシの艦影が表示される。ミラーリングシステムを発動し、マナ・ビロードと呼ばれた領域に突入しようとした途端、弾かれて灰色になる。すなわち、撃沈、ということだ。

(※GM メモ : RP 待機)

スネイル

「詳しい仕組みまでは理解できませんが、おそらくは、周辺のマナとエーテルを雷属性に変換し、防御フィールドに転用しているのでしょう」

スチュアート

「…例の『鍵』がなければ、安全には近づけないということか」

スチュアートの指摘に対し、スネイルは眼鏡を動かして答える。

スネイル

「…既に持ち去られてしまったものを考えても仕方ありません。問題は、これを突破する方法を考えることです」

ミシガン

「それは可能なのか？」

(※GM ×モ : RP 待機)

君達の視線が、スネイルに集まる。

スネイルはため息をつきながら、発言する。

スネイル

「真っ先に思いつくのは、雷属性を別の属性に変換して打ち消すこと。しかし、今回はあるにも規模がでかい。『超戦艦ムサシ』といえど、武装をすべて捨ててそれに回さなければ、まず相手することはできないでしょう。現在、ムサシには既存の大和型の基本設計に加え、イージスシステムをも搭載している状態です。積載量もギリギリといったところです」

来ていた蘆田も、口を開く。

蘆田

「これでも、陸軍の火砲検証システムを使用して、軽量さと頑丈さを並立できる材質で固めてあるのだがな、積載量の限界だけは超えられなかった」

スネイル

「それに加え、式式太陽炉を2基、並列で搭載しているにもかかわらず、全体の重量軽減は困難を極めている状態です。武装に発展型炭素質装甲材を用いることで、粒子を用いた軽量化はできていますが…、そこまでなのです」

(※GM ×モ : RP 待機)

悩む一行は、偏属性クリスタルを用いた対策ではどうにもならないという現実に直面する。

蘆田

「詰め込みすぎると、自力航行すらできないほどのものになってしまふ。

しかし、手がないわけではないのだろう、スネイル卿？」

スネイル

「ええ。打ち消せないなら一点突破をすればよい」

あまりにも脳筋過ぎる方法に、ミシガンが己の耳を疑った。

ミシガン

「…それは？」

スネイル

「高密度のマナの刃を作り、向こうのフィールドを切り裂く。

マナで作られた衝角…謂わば『マナ・ラム』です。

ですが、これには相応のエーテル学の知識が必要になります」

(※GM ×モ : RP 待機)

スチュアート

「エーテル学の専門家か…。となれば、彼女が相応しいだろう」

(※GM ×モ : RP 待機)

スチュアート

「エクセリアだよ。彼女も、相応に魔力を持っている。ですが、彼女だけでは学識が足りない。ジェシカの手も借りなければ」

ムサシ

「正面に取り付けるラムの本格実装をしないといけないって訳ね。よ～し、気合入ってきたッ！」

エーテル学の知識

君達は、隠れ家に戻った。

双子の妊婦でありながらも、ただひたすらに問題に向き合っていた。

(※GM ×モ : RP 待機)

エクセリア

「…なるほど、エーテルとマナを紡いで衝角を…。学識を貸せ、というだけならいい。…だが、それ以上は無理だ。雷属性エーテルが、胎児に一体何をもたらすのか、判然としないからな」

そう言って、エクセリアは腹を撫でる。そこまで大きくなったわけではないが、その胎動を感じるほどで、あまり強気には出られないようだ。

ジェシカ

「エクセリアだけでは、学識の認識に不安があるな。私の見識も貸そう」

(※GM × モ : RP 待機)

ジェシカ

「エクセリアの身体は、妊娠と魔槍の破壊で相当に弱っている。それもあって、戦線には立てないので」

(※GM × モ : RP 待機)

ともあれ、エクセリアとジェシカから、条件付とはいえ協力を得ることができた。

しかし、エクセリアが口を開く。

エクセリア

「…魔女ラニに、手伝ってもらう必要がありそうだな…、『飛空挺ひとつが通れるほどの大穴』という前提条件を加味するのならば」

(※GM × モ : RP 待機)

いざ、淵夏（エナツ）へ

エクセリア

「魔女ラニが住むのは、西ヴァルマーレの特区都市、淵夏（エナツ）だ。L社だったか、そこに行けば隠居している彼女と会えると聞いたことがある」

(※GM × モ : RP 待機)

そして、君達はエナツを目指すことになる。

——大岩山脈から流れ出た雪解け水は、無数の小川となって降り、やがて集まり知神河となる。

この大河の恵みにより、低地ウィルムフロアは、豊かな自然に恵まれ、長らくひとつの都市を養ってきた。

学術都市「シャーレアン」——今や住民が北洋に去り、廃墟と化した都である。

エクセリア

「『ラニ』が住んでいるのは、低地ウィルムフロアを貫く大河、『知神河』の向こう岸。まずは、河を渡るルートを探さなければ…」

(※GM ×モ：RP待機)

探索（スカウト観察）判定 目標値：33

成功時、大きな石版のようなものがある場所に向かえば、なんとか渡れそうだ。

特異点的企業都市、淵夏

君達は、特異点的企業都市とも呼ばれる、淵夏に足を踏み入れた。

エクセリア

「やけに手入れがされているな…」

？？？？

「ところがどっこいですよ、最果ての聖王殿。無人どころか、人もいます」

そこに現れた彼女は、なにか形容しがたい表情で君達を見ていた。

エクセリア

「…お前が、例の…」

アンジェラ

「私はアンジェラ。L社跡地に建てられた『図書館』を監理する者。『調律者』経由で、あなた達の話は聞いているわ。まあ、『頭』から派遣された『調律者』は、相当レベルで嫌そうな顔をしていたけれど、『都市』を代表して、あなた達の滞在を許可するわ」

(※GM × モ : RP 待機)

エクセリアは眉をひくつかせながら、困惑していた。

エクセリア

「アンジェラ、だったか…。お前、本当に人間か？」

その問い合わせに答える、アンジェラは露骨にはぐらかした。

アンジェラ

「分からぬわ。AIとも言えるし、人間とも言える…。魔動機文明時代にやらかしてくれたことで、私はどっちつかずの存在になった…。まあ、詳しく述べるのはよして頂戴、私がさえ判断するに困る内容ですもの」

(※GM × モ : RP 待機)

エクセリア

「『都市』と言えば…確かに、『頭』が支配する領域のはずだ。そして、噂話程度ではあるが聞いたところによると、『図書館』は都市の恥部、そしてその主は都市において存在を許容できないと聞く。

お前、ローランとかいう人物はいたか？」

彼女の問い合わせに、アンジェラは答える。いる、ただ認識が若干異なっている、とも。

アンジェラ

「…確かに、『都市』は憎悪の連鎖を望んでいる。けれど、18年前、ひとりの男が『頭』と交渉したのよ。確かに、ヴァルマーレの決闘者で英雄の…」

そのとき、過去視が発動する――

超える力が捉えたもの

過去視は、その決定的瞬間を捉えていた。

不動遊星

「今日限りで、その憎悪の連鎖は断ち切ってもらう」

『頭』の構成員

「何を言ってるんだ、貴様！そんなもの、できるわけがないだろう！」

ジェナ

「調律者としても、それには同意できないな。この『都市』において、憎悪の連鎖を続けることこそが、我々の目的なのだから」

彼らの意見に業を煮やしたジャック・アトラスが、1枚の、『封書』を巻いた紙を掲げて叫ぶ。

ジャック・アトラス

「先祖が望んだからというだけで、お前達は何百年もこの連鎖を続けてきたわけだが、ここに、ヴァルマーレ陸軍大臣、蘆田正規の署名が記された封書がある！」

不動遊星

「竜詩戦争も続いている中で、そのようなことを続けることは不可能だ。いずれまた、次の侵略者が訪れた時、対応できる戦力がないとなると…な…。」

お前達は、『フェルニゲシュの千年戦争』と呼ばれるお伽噺を聞いたことはないか？

邪竜フェルニゲシュが、ヴァルマーレを襲うという物語だ」

その言葉を聞き、動搖する『頭』と、聞き流すジェナ。

ジャック・アトラス

「無理もない。東ヴァルマーレで起こっている事など、基本誰ひとりとして関わろうとはしなかったからな。しかし…やってきたのだよ。山を越え、谷を越え、この淵夏に辿り着いた来訪者が」

それを見て、アンジェラが口を開く。

アンジェラ

「…確かに、人間の女かと思っていたが、よく見れば違うようね」

『頭』の構成員

「そこまでして、淵夏に何の用があるんだ…？」

不動遊星

「問題は、そのような技術力をヴァルマーレに提供していないということだ。技術は自由のためにある。それを、憎悪の連鎖だけに使うのは以ての外だ。民を守るため、愛すべき皆を守るために技術を使うなら、俺も納得がいく内容だ」

不動遊星はそのように言って、手札からカードをデュエルディスクに置く。
召喚されたジャック・シンクロンは、ひょこっとジェマの元に向かうと飛び跳ねてなにかを訴えかけていた。

ジャック・アトラス

「俺は、遊星のこの姿勢に心を打たれた。お前達はどうだ？ 手を取り合うことで、Z-ONE ほどの相手にさえ、対抗できるのだからな」

<hr>

君達は、過去視で状況を把握した。

アンジェラ

「今のが過去視…？」

エクセリア

「…不動遊星とは後で話をしなければならないようだ…」

明らかに苛ついたような表情で、エクセリアは言う。

それを聞いて、アンジェラは口を開く。

アンジェラ

「なにかやらかしたの？」

(※GM メモ : RP 待機)

アンジェラ

「フフフ。彼らしい。ようこそ、我らの都、特異点的企業都市・淵夏…華の 12 区…跡地の図書館へ！」

ゲブラー

「アンジェラ、彼らは新入りかい？」

(※GM × モ : RP 待機)

ゲブラー

「なるほど、迂回しようとして…。そこを、アンジェラにとつ捕まったと。

災難だったねえ」

エクセリア

「跡地の図書館、だったか。こんな拠点が存続していたとは思ってもいなかつたよ」

ゲブラー

「ここでは司書なんだがな。まあいいさ、さっき入ってきた場所があるだろう？来た道とは別の方向に、もう一つ橋がある。

ここを立派な街にするんだー、ってローランは言っているが、ここはし社のときと比べて特產品がない。そういう問題解決に力を貸してくれるって言うのなら、ここを自由に使ってくれ」

依頼：放棄されたゴーレムの除去

依頼主：ゲブラー

報酬：5000G／完全成功報酬

依頼内容：「放棄されたゴーレム」の撤去

依頼文：

この『跡地の図書館』には、危険が多い。シャーレアン人が遺した、魔法仕掛けの罠が大量に転がっている。工事の邪魔になっている、『放棄されたゴーレム』をどかしてほしい。それが徐に動いた時は倒してくれ。

エクセリアの見識

君達は、ゴーレムについてエクセリアに訊ねることになる。

エクセリア

「ゴーレムが居座っている？それは多分、侵入者対策なのではないか？それなら、簡単に排除できるはず…」

それを聞いた君達は、ゴーレムのもとに辿り着いた。

(※GM × モ : RP 待機)

君達の言葉を聞いたゴーレムは、崩れ落ちて崩壊した。
帰ってゲブラーに報告しよう。

(※GM × モ : RP 待機)

ゲブラー

「合言葉ねえ…。それははじめて聞いたな。『真理は死んだ』、か…。
参考になったよ、感謝する。さて、対岸に渡る準備だ」

君達は、対岸に向かうことができるようになる。
が、そこを塞ぐように、ゴーレムが立っている。

(※GM × モ : RP 待機)

ゲブラー

「ああもう…。『真理は死んだ』！」

その言葉を聞いたゴーレムは、キレてゲブラーに襲いかかった！
赤い物体が、ちゃんと「E」の字を消して崩壊させたため、小石があたって「ひん」つ
てなる程度ではあるが、ゲブラーが若干負傷した。

対岸へ

瓦礫の山を爆薬で吹っ飛ばし、ゲブラーの E.G.O で粗方片付けて…、ようやく、道が開
ける。

ジェシカ

「準備が整い次第、『ラニの隠れ家』に向かうぞ」

エクセリア

「私は準備完了しているよ。さあ、ラニを訪ねに行こうじゃないか」

隠者、魔女ラニ

君達は、魔女ラニのもとまで向かうことになる。

エクセリア

「『ラニ』が住んでいるのは、低地ウィルムフロアの南部にある洞窟…。一見するとわかりにくい場所だから、私が先導しよう。

このまま道なりに、知神河の西岸を進み、崖下に隠れた場所まで進もう」

(※GM ×モ : RP 待機)

探索（スカウト観察）判定 目標値：31

失敗時、少し迷う。

君達は、『ラニの隠れ家』の前の洞窟に辿り着いた。

エクセリア

「ここが、『ラニの隠れ家』の入口だ」

(※GM ×モ : RP 待機)

エクセリア

「…隠れ家があるように見えない、だって？まあ、それは見てのお楽しみってところだ。

ところで、戦いの準備はいいか？ラニは中々に知啓を巡らせる奴でな、エーテル学の知識は海よりも深く、魔法の扱いに関しても精通している。そんな人物が、度を超して偏屈だったらどうなるか…。

来訪者を追い返すための、魔法仕掛けの罠ぐらい、たっぷり用意していることは想像に難くない。ひとまず、奥の壁を触ってみてほしい」

(※GM ×モ : RP 待機)

探索（スカウト観察）判定 目標値：33

成功時、罠を作動させた時に不意打ちをされずに済む。

敵：魔狼×3

君達は、エクセリアに文句を言う。

(※GM ×モ : RP 待機)

エクセリア

「やっぱりな。この程度の使い魔なら、簡単に倒せるとは踏んでいたが…。

さあ、門番役の使い魔を排除したことだし、『ラニ』に会いに行こうか」

奥の壁に近づき、エクセリアが手を翳すと、岩が動き出す。

そこを、君達は通っていく…。

通った先で、君達は声をかけられる。

？？？？

「勝手に人の住まいに上がり込むとは…。礼儀がないな、英雄殿」

青肌で4本腕の、雪魔女人形は、そのように言って君達を煙たがる。

エクセリア

「『ノック』ならしたぞ。物騒な使い魔たちを叩きのめしてな」

ラニ

「いくつになってもその無鉄砲さは変わらんな。それに、可愛げのないところも」

(※GM×モ：RP待機)

ラニ

「さて、用件はなにかな？」

(※GM×モ：RP待機)

君達の用件を聞いたラニは、やはり顔をしかめた。

ラニ

「…やれやれ、ここに来て『魔大陸』とは…」

ジェシカ

「知っているのか、ラニ」

(※GM × モ : RP 待機)

ラニ

「古の書の中で、見たことがあるだけだ。魔動機文明時代に、北アゼルマレムとオデュセリアを股にかけて栄えた亡国ハルロビダソラスが、末期に創り上げた人工浮遊大陸…。竜や蛮神といった強大な力を持つ存在を征すため、禁断の技術を編み出した、一種の研究所があった場所らしい。

「ありとあらゆる、おぞましい知識が集まる禁忌の地。そんな場所に向かっている愚か者共がいるとは…。笑えないな」

ジェシカ

「だからこそ、追わねばならない。

祝福無き者の存在が確認されている以上、その目論見を打ち碎かねばならないのだ」

(※GM × モ : RP 待機)

ラニ

「…なるほど、事情は分かったよ。

…その尾羽をなくすくらいが丁度良い。お前には、な」

(※GM × モ : RP 待機)

そう言って、エクセリアを茶化すラニ。

苛立った様子で、エクセリアは頭を捻った。

ラニ

「50年ほど前…。

急速に領土拡大を始めたレイムホルツァ地方のとある国に対して、いくつかの対抗手段が練られることになった。そこで、私が担当したのが、エーテル収束器だ。

大気に満ちたマナやらエーテルやらを一点に集めて圧縮し、強大な力を得る秘術だ。

ところが、研究も大詰めというところで、哲学者議会の連中は、私の研究成果を、『大量破壊兵器の開発』などと罵った。頭に来た私は、研究成果を禁書封印してやった。

誰にも読めぬよう、誰の手にも入らぬよう…。いざ連中が攻めてきた時、慌てるがいいさ…とな」

(※GM × モ : RP 待機)

エクセリア

「それで、それは今どこにある？」

エクセリアの質問に、ラニは答える。

——「グブラ幻想図書館」の最深部、禁書庫に眠っている、と。

入るために必要な者を、ラニから借り受けて。

グブラ幻想図書館

君達は、グブラ幻想図書館に潜った。

(※GM × モ : RP 待機)

探索（スカウト観察）判定 目標値：29

成功時、書物（メモ群→聖王家階級論考：上巻）を見つける。

必要な禁書ではないようだ…。

不自然なレベルで敵がいない！

そのままずるずると最奥の敵まで辿り着いた。

？？？？

「キヨーッキヨッキヨッキヨ。まさか、ここまで攻め込む下郎がいるとは、きょーちゃんをしても分からなかったよ」

現れた、巨大なフクロウの化け物は、君達を見るなり本を構えて言った。

フクロウの化け物

「かかるべきやがれ！きょーちゃんが支配してくれる！」

敵：ラピデム・サーバス

君達は、ラピデム・サーバスを討ち倒した。

そのとき、幻覚が起きる。

(※GM × モ : RP 待機)

封印されていた『光の加護』…炎のクリスタルが、再び輝きを取り戻す…！

<hr>

エクセリアが禁書を拾い、ラニの隠れ家まで戻ることを提案する。

(※GM × モ : RP 待機)

君達は、ラニに『幻想図書館の禁書』を渡した。

ラニ

「よし、上出来だ。これがなくては、始まるものも始まらないからな」

エクセリア

「あれだけ厳重に守られた禁書庫に、近所へお使いにでもやるように行かせるなんて…、ラニの人使いの荒さは、変わらずと言うことか」

ラニ

「…にしても、ラピデムか…。中々面妖な輩が出てきたと見える…」

(※GM × モ : RP 待機)

ラニ

「いや、なんでもない」

そう言って、ラニは論文の暗号化を解除する。

ラニ

「暗号化魔法を解いた。ムサシとかいう超戦艦でも読めるようになるはずだよ。」

ただし、理論は解ったとしても、エーテルの槍を形成するために必要な莫大なエーテルを、どうやって用立てるつもりだ？」

(※GM × モ : RP 待機)

エクセリア

「超戦艦ムサシには、超重力砲と呼ばれる機構が備わっている。それを運用する時に使うエネルギーをエーテルの槍にすれば、いけるはずだ」

そう言って、エクセリアは君達を連れて立ち去ろうとする。

ラニ

「…待て、聖王。その身体、かなり壊れかかっているようだけど…いつからだ？」

エクセリア

「気付いていたのか。きっと、召喚獣の力の弊害だ」

ラニ

「そうかい。…キヨーカ・ラピデムには気を付けろ。いいな？」

(※GM メモ : RP 待機)

エクセリア

「すぐ行く」

ムサシの超重力砲

君達が、神道衛士団本部に戻ってくると、喜んだようにミシガンが立ち上がる。

ミシガン

「おお！戻ってきたか！」

エクセリア

「ああ、とても重要な手がかりを手に入れて、な」

(※GM メモ : RP 待機)

ミシガン

「なるほど、超重力砲か。分かった、ムサシと取り合おう」

(※GM メモ : RP 待機)

君達は、トウゴ・ランディングのムサシのもとへと戻った。

ムサシ

「その様子だと、解決策が見つかった？」

(※GM × モ : RP 待機)

ムサシ

「そう。この理論と、なぜかついていたラムを使えばいいのね。

いよーし…、徹夜だあああ！！！」

そう言って、彼女はエーテルラムの組み込みを開始する。

(※GM × モ : RP 待機)

灯されし希望

君達は、トウゴ・ランディングのスチュアートに話しかけた。

スチュアート

「『超戦艦ムサシ』への『エーテルラム』の搭載が完了次第、私達は『魔大陸』へと出発することになる。長い旅も、漸く最終地点だ。君は、ムサシたちの作業が終わるのを待つ間、『等護』に残る人達に、挨拶をしてくるといい。私は、ここでムサシたちを手伝っておくよ」

PC への選択肢（誰と話す？）

- ・ミシガン
- ・ヒルダ
- ・エクセリア

ミシガン

ミシガン

「いよいよ出発か…。共に行きたいが、怪我が完治していない俺では、お前達の足手まといになるだけだ。すまんな！ハハハ！天皇『有仁』は、祝福無き者を受け入れ、蛮神の力に手を染めた…。

覚悟はとうにできている。奴を討て！そして、家に帰るまでが遠足だ！」

(※GM × モ：RP 待機)

エクセリア

エクセリア

「…………まさか、見送る側になるとはな。普段であれば、先陣を切って突っ込んでいくタチなのに、不思議な気分だ。必ず帰ってこい。私から言えるのはそれだけだ」

ヒルダ

ヒルダ

「冒険者じゃないか！ミシガンから聞いたぜ、天皇をぶちのめしに行くんだろ？」

アタシも行ってやりたいところだけど、平民の中には、天皇不在の好機に、貴族を倒そうなんて動きもあるからね…、お目付役が必要なのさ。

アタシは、自由を求めてる。ただ貴族共に、復讐したいわけじゃない。憎しみは、憎しみを生むだけだって知ってるからね…。

帝都の留守は、まかしひきな。天皇の代わりに国をまとめようっていう、青臭い総長様を手助けして、裏から支えてやるからよ」

出立前の最後の支度

君達は、出立前にシンファクシ伯爵邸に立ち寄る必要がある。

報告のために必要なのだ。

(※GM × モ：RP 待機)

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「冒険者殿…。わざわざ、挨拶に来てくれたのか…。ありがとう…貴殿には、心配をかけてしまったな。

未だ、私の心は、息子を失いかけた悲しみに包まれたままだ。しかし、息子が信じたヴァルマーレの未来を掴むためには、下ばかりを向いてはいられない…」

トーレス

「…父上。敢えて言わせてもらいましょう。…俺も、ムサシに乗り魔大陸に向かいます。

大丈夫、馬鹿な真似はしません。決戦の地まで、ついていくぞ…友よ」

(※GM × モ : RP 待機)

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「…………トーレス、冒険者…。必ず…、必ず生きて帰ってこい…！」

君達は、彼らに見送られながら、トウゴ・ランディングにいるスチュアートの元まで向かった。

スチュアート

「挨拶は済んだのかい？…そうか、トーレス艦長も乗るのだな」

トーレス

「心配は無用だ。『魔大陸』になにが待ち受けているかは分からんが…必ず勝つぞ、この戦いに…！」

(※GM × モ : RP 待機)

トーレスは、額に「必勝」と書かれたバンダナをつける。

魔大陸へ

スチュアート

「よし…、行くぞ、冒険者！…いざ、決戦の舞台に！」

君達は、ムサシに乗り込む。

ムサシ

「行くぞ。超戦艦ムサシ、魔大陸に向けて出航だ！」

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「英雄殿…。私には、こうやって貴殿らを見送ることしかできない。しかし、我が息子もあなたと共にある…。どうか、ご武運を！」

(※GM × モ : RP 待機)

振り返ると、見送りが増えていた。

ミシガン

「必ず帰ってこい。家に帰るまでが遠足だ！」

(※GM × E : RP 待機)

ムサシ

「『超戦艦ムサシ』、発進！」

飛翔していくムサシ。

そして、彼らは魔大陸へといたる。

<hr>

魔大陸近郊まで、ムサシが接近する。

すぐさまミラーリングシステムと、超重力砲をスタンバイさせる。

ムサシ

「いよいよだ、準備はいい？ ラムアタック、スタンバイ！ 衝撃に備えッ！！」

エーテルラムが形成され、魔法障壁に突撃する。

ヴォルフラム

「おい、大丈夫なのか！？」

ムサシ

「オオオオオ！！」

ムサシが、魔法障壁を貫通する。

そのとき、砲声が聞こえた。艦下から、ディスエリィアの超戦艦が接近する。

ムサシ

「後方に、コミニテルン軍アグリウス級飛空戦艦ッ！ まずい… クラインフィールド、最大展開！ 砲撃が来るよ！」

トーレス

「後部艦砲、目標、敵飛空戦艦！ 牽制しながら振り切るぞ！」

(※GM × モ : RP 待機)

ムサシ

「クソ、ミラーリングシステムを切ったら直撃してしまう！」

トーレス

「最大戦速だぞ、これでも…！どうして振り切れない…！」

…同刻。

セルマ

「かつて星の意志から授かった、光のクリスタル…。…今こそ使う時か」

同じく魔大陸の上空で、フレースヴェルグの上に騎乗して、セルマが来ていた。

セルマ

「これまで、自分の主我のために、多くの犠牲を出してきた。結局私は、凍えた身体を温めるための、仲間がほしかったのだ…。そのために、大義を創った。

許して、シヴァ。…そして、フレースヴェルグ。

それでも私は、どうしても見てみたい…。少女が雪原のただ中で、凍えずとも済む時代を…」

(※GM × モ : BGM 「雪上の足跡 ~蛮神シヴァ前哨戦~」)

ムサシの直上を、フレースヴェルグが通過する。

そして、そこからセルマが飛び降りる。

ワイバーンが弾よけとなり、守る。

ありがとう、フレースヴェルグ。

ヴォルフラム

「あれは…冰女？何をするつもりだ！」

聖女シヴァ——いえ、願いによって造られた、私自身の神よ！

今こそ我が身に降りて、真の融和のために、最期の静寂を！

シヴァが、降臨する。

君達を庇うように、弾を受け止め霧散させる。

尚も砲撃は止まず、シヴァはそれを誘導する。

直撃弾もあったが、耐えて突撃する。

コミニテルンの飛空戦艦に、巨大な氷の塊がぶつかった。

氷の塊が霧散し、疲労困憊の様相を、シヴァが見せる。

その隙を突いて、大量の砲弾がシヴァを襲う。

高度を維持できなくなり、シヴァは雲海の底へと落ちていく。

さらばだ、光の戦士。私を導いてくれて、ありがとう。

セルマの身体は、霧散して消滅した。

ヴォルフラム

「…さらばだ、『氷の巫女』よ」

君達は、ムサシに話しかける必要がある。

ムサシ

「…おまえらの友が、逝ってしまったのか？

まあいい、アグリウス級に、後ろに張り付かれた時は焦ったけれど、ともかく無事に『魔大陸』に立つことができた」

トーレス

「犠牲になってしまった『氷の巫女』のためにも、天皇と祝福無き者の野望を阻止せねばならんな」

報酬

基本要素

- ・経験点：7500 点
- ・資金：5000G
- ・名誉点：なし
- ・成長回数：10 回

その他報酬